

紫の上の「つれなし」をめぐって

馬 淵 敬 子

はじめに

源氏物語の第二部若菜巻における紫の上とその苦悩については、従来より様々な見地から論じられ、第二部主題論とも絡めて詳細に検討されてきた。すでに昭和三十四年の阿部秋生氏⁽¹⁾、三十五年の森一郎氏⁽²⁾の御論において、紫の上の心情の推移を辿る作業が第二部の理解に殆ど不可欠であること、女三宮降嫁の物語の少なくとも前半においては、物語の中心は紫の上の苦悩にあるとさえ言い得ることが指摘されている。具体的な「苦悩する紫の上像」への論考も数多く出されているが、従来、年代記的な挿話あるいは紫の上讀美のヴァリエーションなどの解釈に止められていた⁽³⁾明石物語を、女三宮降嫁とともに或いは降嫁以上に紫の上の苦悩を⁽⁴⁾深めさせる要素を語るものとして位置つけた後藤祥子氏や森一郎氏の御論は特記に価するだろう。これはすでに秋山虔氏⁽⁵⁾の一連の御論考においても別の見地から指摘されていたことであるが、明石一族の慶事が——とりわけ、将来の帝の外祖母としての明石の君

の存在性が——紫の上の内面にどのようなように映っていたか、言い換えれば、紫の上の心情のレベルに明石物語を取り込み、意味づけた点において傾聴すべき新見であると思う。そして、そのような解釈に立てば、女三宮物語の前半部分は紫の上の苦悩を追跡するという主題の下に緊密性をもって総括されるだろう。

このように積み重ねられてきた研究を前にして、第二部の紫の上を自分なりの角度から捉え直そうとすると、その方法として各場面での「ことば」にこだわりを持つことは、ある意味で最も簡便な、そして最も基本的な手段といえるだろう。段階を追って落ちなく語られる紫の上の苦悩——その変化・無変化を「ことば」のレベルでどのように捉えられるか。小稿では「ことば」を手がかりに、女三宮降嫁以後の紫の上像を探って行きたい。

一

若菜巻における紫の上の登場はやや遅く、すでに朱雀院の婿えらびが奸余曲折を経て女三宮の源氏への降嫁が決定した後であっ

た。出家した朱雀院を見舞った源氏が女三宮降嫁を承引して帰邸すると、そこに見出されるのは次のような紫の上である。

紫の上も、かかる御定めなど、かねてはほの聞きたまひけれど、「さしもあらじ。前斎院をもねむころに聞こえたまふやうなりしかど、わざとしも思し遂げずなりにしを」など思して、さることやある、とも問ひきこえたまはず、何心もなくおはするに、いとほしく、
(四一四頁)

朱雀院に女三宮の源氏への降嫁を薦めた乳母が、「前斎院」を挙げて源氏の高貴な妻を獲得することへの執着と説いたように、ここでも紫の上によって朝顔姫君が想起されていることが注目される。朝顔巻については、吉岡曠⁽⁹⁾氏の御論をはじめとして詳しく説かれているところであるが、世の噂となった源氏と朝顔姫君の關係への紫の上の不安は源氏の弁明によって解消されていたにしても、その記憶は約七年を隔てた若菜巻にまで引摺られていたのである。ただ、その記憶は朝顔姫君でさえ事無く過ぎたのだから、今回の降嫁も実現することはあるまいという、朱雀院や乳母とは逆の方向に作用する。「何心もなく」とは、朝顔事件の記憶の上に成立つ、女三宮降嫁の噂に動じることのない、源氏への全面的信頼の姿であろう。少なくともこの場面の視点人物＝源氏にはそのように見えており、そのために降嫁承引の伝達が躊躇されねばならなかった点、重要である。女三宮降嫁を告げ知らされる以前の紫の上を表す言葉として、「何心もなく」を踏まえておきたい。

翌日、女三宮降嫁の件を知らされた紫の上の反応は、源氏の予

想に反して次のようなものであった。

はかなき御すさびごとをだに、めざましきものに思して、心やすからぬ御心ざまなれば、いかに思さんと思すに、いとつれなくて、「あはれなる御譲りにこそはあなれ。ここには、いかなる心をおきたてまつるべきにか。めざましく、かくてはなど咎めらるまじくは、心やすくてもはべなさんを、(中略)」と、卑下したまふを、
(四一四頁)

ここで最も注意すべき言葉は、紫の上の態度を表す「いとつれなくて」であろう。源氏が、「あまり、かう、うちとけたまふ御ゆるしも、いかなれば、とうしろめたくこそあれ」と返答したように、紫の上の語る言葉はあまりにも冷静である。「つれなくて」を冷淡の意に解することさえ可能であるかもしれない。むしろ「我も人も心得て、なだらかにもてなし過ぐしたまはば」と、女三宮降嫁に対する心構えを繰り返し教え諭そうとする源氏にこそ、焦燥や動揺が認められ、紫の上には前日の「何心もなく」と同質の穏やかさ、或いは逆に、源氏との間に距離を置いた冷静さが対置されているように思われる。そして事実、以後の女三宮受け入れの準備にも、紫の上は助力を惜しまない。

だが、そのような浅い読みに止まることの非は自明であろう。しばしば指摘されるように、源氏が事を都合良く、朱雀院に懇願されてのやむなき承諾として伝え、紫の上がそれをそのまま——紫のゆかりとしての女三宮に抱く源氏の好奇心が降嫁承引に大きな影響を与えていることを抜きにして——受け取ったことは無視できない。それは以下に続く心中思惟の中でも紫の上の理性判断

の前提になっている。だが、紫の上に「つれなし」という表面上の冷静さを取らせたより大きな理由は、宿世の定めとしての事態認識であつたようだ。

心の中にも、「かく空より出で来にたるやうなることにて、のがれたまひ難きを、憎げにも聞こえなさじ。わが心に憚りたまひ、諫むることに従ひたまふべき、おのがどちの心より起これる懸想にもあらず。堰かるべき方なきものから、をこがましく思ひむすばほるさま、世人に漏りきこえじ。

(四一四七頁)

この段に見られる紫の上の事態認識をめぐっても、すでに諸家の御論考において詳細に検討されているところであるが、紫の上はこの降嫁を第一に「空より出で来にたるやうなること」と捉えている。おそらく、人知の及ばぬ運命的なもの⁽¹⁰⁾、宿世に定められた事としての認識であろう。世を騒がせ紫の上自身も苦しんだ朝顔姫君の一件を乗り越えた末の平穩であるべき晩年に突然降りかかったこの事態は、そのようにでもして納得し、諦めて行くほかになかったのであろうか。宿世観に基づく紫の上の思考は、これに対するあらゆる抵抗、後向き姿勢——嫉妬はもちろん嘆くことさえ「をこがまし」として規定し、それを禁じて行く。また、そのような「をこがまし」さを世の人々に察知されることは、紫の上を敵視する継母式部卿宮の北の方をはじめ世の人の心無い批評に身を曝すことになるのであり、紫の上の自尊心がそのような世評の前に自己防衛を図るのかもしれない。さらに、女三宮と紫の上の間で板狭みになる源氏への思いやり。これらが、紫の上に「つれ

なし」という一見冷静な応対をさせているのだろう。「何心もなくて」と「いとつれなくて」とは全く異次元の心境・姿勢の紫の上を表わしている。「つれなし」の背景には紫の上の全人格を映す深い思考が働いており、二つの表現は決して単純な延長線上に結び合わされるものではないのである。

しかし、右のことは「つれなし」という言葉の意味を考えてみれば、自ずと明らかになることではなかったか。「つれなし」という言葉は、知つていながら素知らぬふりをする、相手の気持ちや当面している事態をよく理解していながら無理解、無関心や平静を装うことを言う。その最もわかり易い例が、「つれなき人」という表現であろう。この表現は、源氏にとっての空蟬や藤壺、或いは六条御息所にとっての源氏などに多く使われていた。

つれなき人もさこそしづむれど、いとあさはかにもあらぬ御気色を、ありしながらのわが身ならばと、取り返すものならねど、忍びがたければ、この御畳紙の片つ方に、

空蟬の羽におく露の木がくれてしのびしのびにぬるる袖かな

(一一二〇四頁)

これは有名な空蟬巻の巻末部だが、ここで「つれなき人」と呼ばれる空蟬は、源氏の空蟬への思いが一時の気紛れなどではないことを充分に理解している。そして、源氏に応えたい心の動きもなわけではない。しかし、父衛門督生前の、入内を志した頃であればともかく、老伊予介の後妻となつてしまった今の境涯を思うと源氏を受け容れるわけにはゆかず、情を解さぬ体拒否を続け

るのである。それが空蟬を「つれなき人」と呼ぶ所以であり、この場面は空蟬の落ち着き払った外面と煩悶する内面とを巧みに表現している。

また、朝顔巻では源氏から朝顔姫君に対してこの言葉が使われていた。源氏の歌に「つれなきを昔にこりぬ心こそ人のつらきに添えてつらけれ」とあり、或いは、

大臣は、あながちに思し焦らるるにしもあらねど、つれなき御気色のうれたきに、負けてやみなむも口惜しく、

(二一四七八頁)

と、源氏の朝顔姫君への執心の理由が朝顔姫君の「つれなき」にあることが表現されている。そのような朝顔姫君の内心は、

げに人のほどの、をかしきにも、あはれにも思し知らぬにはあらねど、「もの思ひ知るさまに見えたてまつるとて、おしなべての世の人の、めできこゆらむ列にや思ひなされむ。

(二一四七七頁)

以下に叙べられており、それはすでに葵巻に散見されたことでもあるが、朝顔姫君は源氏を慕いつつも一歩退いた位置を守り続けようと努めているのである。源氏に「つれなき」を恨まれる朝顔姫君の表面上の態度と内心の葛藤の関係はこのように解される。

以上の例に見た通り、「つれなし」という言葉は表面の平静さ、冷淡さよりもそれによって隠された内面の複雑さを照らし出す表現だと言える。そして、そのことさえ踏まえれば、先の紫の上を表現する「いとつれなくて」という言葉の意味するところは誤りなく理解されて来よう。紫の上は女三宮降嫁によって自らが置か

れる立場の難しさを認識するからこそ、内心の動揺や悲嘆を抑し隠して平静さを装ったのであり、「何心もなくて」から「いとつれなくて」へは、紫の上が意識的に装った平行移動であったと言えるだろう。「つれなくて」の一語に、事態への紫の上の深い洞察と妥協のない自己制御を読み取ることができるのである。

二

ところで、この「つれなし」という言葉は先の場面だけに使われるのではない。鈴木日出男氏のご指摘もあるように、「つれなし」は若菜上下巻を通しての紫の上に繰り返し用いられているのである。以下、その箇所を順次検討し、繰り返される「つれなし」の様相とその意味を探って行こうと思う。なお、便宜上、先の「いかが思さんと思すに、いとつれなくて」を(イ)とする。

(ロ)三日がほど、かの院よりも、主の院方よりも、いかめしくめづらしきみやびを尽くしたまふ。対の上も事にふれて、ただにも思されぬ世のありさまなり。げに、かかるにつけて、こよなく人に劣り消たることもあるまじけれど、また並ぶ人なくならひたまひて、華やかに生ひ先遠くあなづりにくきはひにて移ろひたまへるに、なまはしたなく思さるれど、つれなくのみもてなして、御渡りのほども、もろ心にはかなきこともし出でたまひて、いとらうたげなる御ありさまを、いとどあり難しと思ひきこえたまふ。

(四一五六頁)

い年ごろ、さもやあらむと思ひし事どもも、今は、とのみもて

離れたまひつつ、さらばかくにこそはと、うちとけゆく末に、ありありて、かく世の聞き耳もなのめならぬ事の出で来ぬるよ。思ひ定むべき世のありさまにもあらざりければ、今より後もうしろめたくぞ思しなりぬる。さこそつれなく紛らはしたまへど、さぶらふ人々も、「思はずなる世なりや（以下略）」など、おのがじしうち語りひ嘆かしげなるを、つゆも見知らぬやうに、いとけはひをかししく物語などしたまひつつ、夜更くるまでおはす。

（四一五九頁）

(イ)で、源氏から女三宮降嫁についての諒解を求められた紫の上が即時に全ての状況を判断し、内心の動揺を完璧に隠して応じたことは、すでに考察してきた。物語は紫の上の「つれなし」づくりを記した後、年明けての玉簫による源氏四十賀に舞台を移し、その華々しさを引継ぐようにして女三宮の六条院降嫁の時を設定する。(ロ)はその降嫁当日の情景である。「ただにも思されぬ世のありさま」や「なまはしたなく思さるれど」など、降嫁を目の辺りにしての紫の上の複雑な心境が率直に語られている。しかし、前述したように紫の上の自尊心が世間の眼に対して敏感にならざるを得ないのであれば、この降嫁当日の場でこそ、紫の上は気落ちしてはいられない。内心の動揺は努めて隠蔽される。そのような紫の上の有様が源氏の視点から捉えられるとき、選ばれた表現が「つれなくのみもてなして」である。健気に振舞う紫の上に「いとどあり難し」との讃辭が贈られる前には厳しく感情を抑制する紫の上の姿があり、それをしかと認める源氏がある。この場

での紫の上も、やはり「つれなし」に集約されるだろう。

続いて(ハ)は、「目に近く移ればかはる世の中を行くすゑとほくたのみけるかな」の歌が詠まれた降嫁三日目の晩。源氏を女三宮方へ送り出した紫の上は独り、この事態を振り返る。朝顔事件以来抱き続けた不安とようやく掴みかけた平穩、それを突然無に帰した女三宮降嫁の衝撃は、更に将来に渡っての愛情不信へとつながっている。しかし、そのような物思いも女房たちの前では中断され、紫の上は女三宮歓迎の意を口にする。(ロ)と時間的にも連続する(ハ)において視点は女房たちに移っているが、彼女達の眼に映るのもやはり内心の悲嘆を隠そうと努める紫の上であり、それを表現する言葉も同じく「つれなし」である。

この後、物語は源氏の夢枕に立つ紫の上を語り——それは抑制された精神の、極限状態における発露であったといえよう——、臘月夜と源氏の再会と、それをもはや咎めない紫の上を挿んで女三宮と紫の上の対面の場に至る。両者の間に友好的な関係が結ばれたことでこの件はひとまず落着する。こうしてみると、(イ)(ロ)(ハ)は若菜巻における紫の上の問題の第一段階にあたる部分であった。それらの各場面において、紫の上が繰り返し「つれなし」という表現によって捉えられることは、単なる偶然ではないだろう。降嫁告知直後の紫の上の姿を確かめる如くに「つれなし」の語は繰り返され、若菜巻における紫の上の基本表現として据えられているのである。

さて、次にこの言葉が使われるのは、若菜下巻に入って四年間の空白を挿んだ冷泉帝讓位後の文章においてである。

(二) 対の上、かく年月にそへて方々にまさりたまふ御おぼえに、わが身はただ一ところの御もてなしに人には劣らねど、あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなむ、さらむ世を見はてぬさきに心と背きにしがな、とたゆみなく思しわたれど、さかしきやうにや思さむとつつまれて、はかばかしくもえ聞こえたまはず。内裏の帝さへ、御心寄せことに聞こえたまへば、おろかに聞かれたてまつらむいとほしくて、渡りたまふこと、やうやう等しきやうになりゆく、さるべきこと、ことわりとは思ひながら、さればよ、とのみやすからず思されけれど、なほつれなく同じさまにて過ぐしたまふ。春宮の御さしつぎの女一の宮をこなたにとり分きてかしづきたてまつりたまふ。その御あつかひになむ、つれづれなる御夜離れのほども慰めたまひける。いづれも分かず、うつくしくかなしと思ひきこえたまへり。

(四一—六九頁)

周知の通り、(一)までの間にはかなりの分量を占める明石物語が置かれている。養母紫の上にとつても慶事たるべき明石女御の皇嗣出産は、それを語る物語の状況やそこでの明石の君と源氏による紫の上頃によって逆に紫の上を疎外された位境に追いやられ、それはこの御代替りの時点において、紫の上自身の認識するところとなっているようだ。¹² 女三宮の叙位昇進や確實視される明石一族からの立后、立太子を前にして、六条院の榮耀に寄与することのない立場の自覺と朱雀院や内裏の思惑を憚る源氏の夜離れとが併せて紫の上を苦悩させるとき、そこにおいても課されるのは「つれ

なし」である。「なほ、つれなく同じさまにて」という表現によって、六年前の女三宮降嫁当初と少しも変わらない紫の上の姿勢が強調される。

紫の上の苦悩に新たな要素が加えられたとき、或いはそうでなくとも「空白」後の六条院体制据え直しの場において、再び「つれなし」の語を以て紫の上を捉えようとするのは、それがこの主題の下で紫の上と与えられた特別な表現であるからではなからうか。紫の上がこうした逆境に対して自らに選んだ姿勢を一貫して守り通しているという点に紫の上の理想性を見たり、そのような紫の上の努力によって六条院の平穩が維持されてきた事を指摘することも可能である。だが、そのような「解釈」の前に、紫の上の姿勢が常に「つれなし」という言葉で表現されているという事自体に眼を向けたい。若菜巻における紫の上の苦悩の性格——現前する事態への動揺をどこまでも隠して平静を装わねばならない（これは臘月夜的一件についても同様である）——は「つれなし」という言葉そのものではないだろうか。「つれなし」は若菜巻の紫の上の苦悩を象る表現とさえ言うてよいのではないかと思う。そしてこのことは数値上の現象としても指摘することができる。『源氏物語大成索引篇』によって調べると、形容詞「つれなし」に名詞「つれなさ」「つれなしがほ」動詞「つれなしづくる」などを加えると、これらの言葉は源氏物語中に全体で一〇九の用例がある。決して稀な表現ではなく、むしろ聞き慣れた言葉なのだ、それだけに、今問題としている紫の上の「つれなし」ほどの深刻な意味合いを持つものも多くはないだろう。従ってここでは、

当面問題となる若菜上巻から幻巻までの範囲に絞って考えて行きたい。第二部での用例数は二十一、内訳は次の通りである。

(巻名)(用例数)(対象人物)

若菜上	5	紫の上3	明石の君1	柏木1
若菜下	3	紫の上1	源氏1	玉璽1
柏木	1	女三宮1		
夕霧	12	夕霧8	落葉宮4	

(その他の巻には用例なし。参考に、同じく妻の座をめぐる紫の上の苦悩が問題にされた朝顔巻での用例は、朝顔姫君3、源氏1の計四例である。)

一見して、夕霧巻で頻繁に用いられる言葉であることがわかるのだが、本文に当たってみると大半が今問題にしているような意味深長な表現とはなっていない。また、論点は女三宮物語内での「つれなし」にあるので、ここでは夕霧巻で多用されている事実を記すに止める。従って問題にすべき用例は若菜上、下、柏木巻における九例というごく限られた数になる。このうち紫の上への用例が約半数の四例であることを確認して、九対四の比から「つれなし」を紫の上の表象語と言えるかどうかを以下に検討して行きたい。はじめに明石の君、柏木、玉璽の三例(順に(㉒)(㉓)とする)は比較の意味の軽いものである。

(㉒)「……隔てて、今は、誰も誰もさし放ち、さかしらなどのたまふこそ幼けれ。まづは、かやうにはひ隠れて、つれなく言ひおとしめたまふめりかし」とて、御几帳をひきやりたまへれば、

(四一―一七頁)

(㉓)「一日はつれなし顔をなむ。めざましう、とゆるしきこえざりしを、見ずもあらぬやいかに。あなかけかけし」と、はやりかに走り書きて、

(四一―四二頁)

(㉒)我もおはかたには親めきしかど、憎き心の添はぬにしもあらざりしを、なだらかにつれなくもてなして過ぐし、

(四一―五一頁)

(㉒)は明石の君が父入道の消息や願文を女御に示していたところへ立入った源氏の戯言。(㉓)は柏木の女三宮垣間見の段の結びで、小侍従から柏木への手紙の文中。小侍従は柏木が女三宮を垣間見たことには気付いていないのだから、「つれなし顔をなむ」に柏木の複雑な胸中まで読み込む必要はなからう。(㉒)は女三宮の不義を知った源氏が苦悶する中で、かつての玉璽を思い出している感懐。確かに、当時の玉璽は源氏の懸想に困惑していたわけだが、この文脈ではそのような玉璽の心中に重点があるのではなく源氏に見せた素気ない態度そのものを表現しているに止まるだろう。以上の三例は紫の上の「つれなし」のような意味内容の深いものではないので、同語の紫の上への特定性を認めるにあたつての支障とはならないだろう。

問題となるのは残る二例である。いずれも先の三例とは異なり、紫の上への用例に比肩する用法であると思う。

(㉒)つれなしづくりたまへど、もの思し乱るるさまのしるければ、女君、消え残りたるいとほしみに渡りたまひて、人やりならず心苦しう思ひやりきこえたまふにや、と思して、

(四一―四六頁)

(リ) (出家ヲ思止マルヨウニ) と聞こえたまへど、頭ふりて、いとつらうのたまふ、と思したり。つれなくて、恨めしと思すこともありけるにや、と見たてまつりたまふに、いとほしうあはれなり。
(四一九七頁)

例は若菜下巻の後半、柏木の文の発見によつて女三宮と柏木の密通が露顯した直後に位置する。事態を察知して苦悶する源氏の「故院の上も、かく、御心には知ろしめしてや、知らず顔をつくらせたまひけむ。思へば、その世の事こそは、いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ」という独白に続く場面であり、他ならぬ紫の上の視点によつて捉えられた源氏の「つれなしづくり」はそこに至るまでの一連の緊張を一氣に表現して見事である。紫の上の推察する源氏の「つれなしづくり」の理由は得ていないが(その思い違い自体にこの時点での紫の上の問題が指摘できよう)、柏木と女三宮への憤りと、二人の過ちが突き付ける源氏自身の過去と藤壺との罪に苦悩する源氏の姿である。(リ)は薫出産後、出家を願う女三宮に対する源氏の感懷。「つれなくて」は、「若くおほどきて」とばかり繰り返されていた女三宮の密通事件以後の辛苦——罪の意識からの源氏への畏怖や薫誕生後もますます募る源氏の冷淡さ、そして自らの宿世のつらさ——の深さを物語り、女三宮像に新しい一面を加えるものと言える。この二例は紫の上の四例と同質の用法として、比較の対象になくはなるまい。そしてその場合、四対二では紫の上への「つれなし」の集中性を指摘することはやや困難に思われる。

だが、この計六例の使用されている位置関係に注意すると、紫

の上の四例と源氏・女三宮の二例を区別することができる。すなわち——これは第二部の主題論や構造論にも関わる問題だが——(リ)(ロ)(ハ)の四例は女三宮物語の前半(若菜上・下の前半)紫の上の苦悩を中心課題とする範囲での使用であり、(例)は女三宮物語後半(若菜下・柏木巻)女三宮柏木密通事件の主題下における用例である。両者の区分は明確であり、このことから、少なくとも物語が紫の上の苦悩に中心を置く範囲内では、「つれなし」は紫の上に特定の使用される表現であると言えるのである。

第二部全体で二十一例、女三宮物語中では九例、そのうち四例もが紫の上への使用であること、且つ比較対象となり得る源氏、女三宮への二例は同じ女三宮物語でも主題の異なる物語後半部でのものであることから、「つれなし」の紫の上への特定性はデーター的に裏付けられたものと言えるだろう。なお、朝顔巻での紫の上に「つれなし」の語は一度も用いられておらず、このこともまた、若菜巻での紫の上を側面から説明するデーターとなろう。

三

さて、前節において検証した「つれなし」の(リ)(ロ)(ハ)と(例)が女三宮物語の前半と後半にはつきりと分かれて分布することについては、更に考察する必要があると思われる。紫の上は女樂の翌晩、憂愁の絶えぬ人生への嗟嘆を残して発病し、やがて二条院へ移される。そこに柏木の侵入する隙が生じて女三宮との密通という事件が引き起こされるのだが、それは同時に物語の転換でもあったと言えよう。大雑把に言つて、この先女三宮物語の後半が追

求する問題は密通事件の当事者柏木と女三宮の憂悶とその真相を知るところとなつた源氏の苦悩である。紫の上については、発病、仮死、小康の後、あまり物語の表舞台に立たなくなり、以後御法巻に至るまでの彼女の動静は（夕霧巻で一場面を除くと）ごく記事的なものしか迎れなくなる。紫の上の苦悩がどのように昇華されたのか、あるいはされなかったのかは別として、物語の力点が紫の上の苦悩から柏木女三宮密通事件へ移行するとき、その苦悩を表現していた「つれなし」の語が紫の上を離れるのは当然といえるかもしれない。だがこの場合、紫の上を離れた「つれなし」が新たな担い手を得ていることが重要であろう。その担い手とはもちろん源氏であり、女三宮である。

先の(イ)の場面を振返つてみよう。ここで源氏を捉える視点は、物語前半での「つれなし」の担い手紫の上である。過去に犯した罪の宿命的な深さに対する再認識を迫られる源氏は物語における新しい苦悩主体であり、その源氏が旧苦悩主体の紫の上によって「つれなし」の語で表現されている。また、紫の上の苦悩と以下に追求される源氏の苦悩とは、事態を知り、且つそれに対する感情の表出を禁じられる点で本質的に共通する。（それはまた、事態の露顯したことを知る女三宮のものであり、ゆえに女三宮にも「つれなし」が使われるのであろう。が、ここから先の苦悩の中心はやはり源氏だといえる。）女三宮降嫁の真のテーマが紫の上の苦悩であつたら、密通事件のそれは源氏の苦悩であらう。その紫の上の苦悩の結果としての病が小康を得た時点で——とは紫の上の苦悩の問題が終息した段階で——入れ替わるように源氏に密通の事実が知らされ

る。そのような物語の転換点にあるこの一行は、「つれなし」という言葉とその語の表す苦悩が紫の上から源氏へと譲り渡されたことを象徴しているように私には思われる。

女三宮の降嫁に発した物語において紫の上から源氏へと受継がれる「つれなし」は、同語によつて表される苦悩の共通性からも、この物語において語脈を成すものと見てよいのかもしれない。

その語脈について言うのであれば、前節で黙止したもう一つの問題についても掘り起こさねばならない。先に示した通り、源氏物語中に「つれなし」とその派生語は一〇九例を数える。それらの中には紫の上と同様の立場においての「つれなし」も散見されるのである。源氏物語が背景にもつ一夫多妻制の社会での女性の悲哀は、例えば葵の上と六条御息所の確執によつても問題化されていたが、紫の上の苦悩としてこれだけ深く追求される問題の近景遠景に同じ「つれなし」のあることの意味は、考えておく必要があるだろう。

(Ⅷ)これこそたまへるはかなき例なめれ。つれなくて、つらしと思ひけるも知らで、あはれ絶えざりしも、益なき片思ひなりけり。
(番木巻 一一六〇頁)

(Ⅸ)かかる空にふり出でむも、人目いとはしう、この御気色も、憎げにふすべ恨みなどしたまはば、なかなかことつけて、我也もむかひ火つくりであるべきを、いとおいらかに「つれなうもてなしたまへるさまの、いと心苦しければ、

(真木柱巻 三—三五五頁)

(Ⅹ)女君は、日ごろもよろづに思ふこと多かれど、いかで気色に

出ださじと念じ返しつつ、つれなくさましたまふことなれば、

(宿木巻 五—三九—頁)

(又)は雨夜品定めで語られる夕顔の例である。夕顔のおとなしさに安心して訪れの途絶えがちな頭中将や、頭中将の北の方(右大臣の四君)側からの脅迫に悩む夕顔は、それほどまでに追いつめられた心中を頭中将に全く推察させずに失踪している。夕顔の「つれなし」は死後、乳母子の右近によつて「人にももの思ふ気色を見えんを取づかしきものにしたま」うという性格に帰して捉えられてしまい、そのために、頭中将もここで「わづらはしげに思ひまつはす気色見えましかば、かくもあくがらせざらまし」とさえ言つて、一段が受ける左馬頭の説——恨み言も言わずに我慢して「上はつれなくみさをづく」る事を否定し、不満があれば何気なくほめかすのを善しとする——と同様、「つれなし」の心情を斟酌しようとはしていない。だが、弱い立場に置かれた妻妾の「つれなし」づくりが一方的に批難されてよいものかどうかは、紫の上の例や以下に見る例などから答えが出てくるだろう。

(例)は玉鬘が鬚黒の新しい妻になったことによる元北の方の悲劇の一場面。雪の降る晩、新妻のもとへ通う夫を送り出す前妻の心遣いとそれを思いやる夫とは、女三宮降嫁における「三日がほど」の情景を彷彿とさせる。この鬚黒北の方の悲劇と女三宮降嫁における紫の上の悲劇の関連性——単なる紫の上の悲劇の先取りではなく、鬚黒北の方の悲劇が生む継母北の方の激怒によつて、紫の上には帰るべきいかなる場所もないという極限状況が作り出されていること——は大朝雄二氏⁽¹⁾によつてすでに説かれているところ

であるが、その鬚黒北の方にもやはり「つれなし」が使われている。殊に、次の展開において北の方が火取の灰による乱暴を起こしてしまふことを考えるとき——それは一方で物怪の仕業とされながら、木工の君の歌では北の方の鬱積した思いの表れであると訴えられる——そのような北の方にも平静さを装つて耐え忍ぼうとする姿勢のあること、それが「つれなし」という言葉で表現されていることには何らかの意味づけが可能であり、また必要でもある。そしてさらに例、匂宮に迎えられる形で宇治を出た中の君は世に幸い人と呼ばれながらも匂宮と夕霧六の君との結婚に思い悩む。紫の上の苦悩との類似性が指摘される中の君の例においても「つれなし」の表現が取られているのである。

思うに、紫の上の例も含めて、これらの繰り返される「つれなし」は雨夜品定めで否定視された「つれなし」への反指定ではないだろうか。一夫多妻制社会において、妻妾間の摩擦は避けられないものだろう。その現実の中で弱い立場に置かれた妻は、やはりその問題に黙って耐えて行くしかない、そのような妻として、女性としての悲嘆と苦悩の実情を物語は幾重にも繰り返して訴える。そのとき、「つれなし」がその苦悩を表す言葉として、言い換えれば、その主題性を荷う語として脈々と受け継がれているのである。「つれなし」は紫の上の苦悩だけでなく源氏物語に描かれた多くの女性の苦悩を象る表現でもあるだろう。あるいはこれも、妻の座をめぐる苦悩という主題性を明らかにする語脈と捉えてよいのだろうか。

おわりに

若菜巻に至って初めて紫の上は源氏物語の女主人公らしくなる。その主人公性は、紫の上の苦に耐える姿から導き出される理想性よりも、その苦悩する姿が克明に描かれる点に由来しよう。そうした精緻な紫の上描写の核となる表現「つれなし」は、女三宮物語の主題性を担って脈をなすものであり、また、一夫多妻制下の女性の苦悩を象って源氏物語の中でくりかえされる表現でもあった。そのことは、紫の上の「つれなし」の特定性を減ずるものではなく、逆に紫の上の苦悩という問題の根の深さを示すものとして解釈したい。

注(1) 阿部秋生氏「紫の上の出家」(平安文学 研究と資料)至文堂、昭34)

昭34)

(2) 森一郎氏「女三の宮降嫁の事件」(国文学攷)昭35・5、後に『源氏物語の方法』桜楓社、昭44所収)

(3) 例えば、野村精一氏「若菜巻試験拾遺——悲劇的状况について——」(源氏物語の創造 増訂版)桜楓社、昭44所収)

(4) 後藤祥子氏「若菜」以後の紫の上」(源氏物語研究)昭54・12)

(5) 森一郎氏「六条院の変容——若菜上・若菜下」(国文学)昭62・11)

(6) 秋山虔氏「若菜」巻の問題ひとつ——源氏物語の方法に関する断章——」(関西大学「国文学」昭35・10)「外的時間と内的時間」(国文学)昭45・5)「源氏物語の方法に関する断章——『若菜』巻における明石物語・統——」(源氏物語とその周辺)武蔵野書院、

昭46)

(7) 阿部秋生氏前掲書、三五頁

(8) 引用本文は全て、小学館日本古典文学全集本に拠る。

(9) 吉岡廣氏「鴛鴦のうきね」(中古文学)昭49・5、及び10)ほか

に、秋山虔氏「紫上の変貌」(国文学)昭39・5、今井源衛氏「紫上」(源氏物語講座 第三巻)有精堂、昭46)など。

(10) 深沢三千男氏「紫の上——悲劇的理想像の形成——」(国語国文)昭40・4。後に「源氏物語の形成」桜楓社、昭47所収、「若菜上・下——若菜の巻の方法——」(源氏物語講座 第四巻)有精堂、昭46)も、この紫の上に運命としての認識を見る。

(11) 鈴木日出雄氏「源氏物語要語辞典」(別冊国文学「源氏物語事典」秋山虔編、学燈社、平1)の「つれなし」の項を参照されたい。

(12) 前掲書(4)(5)(6)。

(13) 鈴木日出雄氏「語脈」(国文学)昭58・12、池田和臣氏「語脈」(表現・発想事典、前掲書(11)所収)

(14) 大朝雄二氏「女三宮の降嫁」(源氏物語正篇の研究)桜楓社、昭50所収)

(15) 全集本、第五卷三九一頁、頭注。